

ICT街づくり推進会議 地域懇談会@豊田 議事要旨

1. 日時

平成25年5月31日（金）15：20～16：30

2. 場所

足助病院1階 講義室1

3. 出席者

(1) ICT街づくり推進会議構成員

岡座長

(2) ICT街づくり推進会議検討部会構成員

梶浦構成員、齋藤構成員、佐藤構成員、細川構成員、武藤構成員

(3) 豊田市における実証プロジェクト関係者

太田豊田市長、森川名古屋大学大学院教授、劔持名古屋大学大学院研究員、小倉岐阜大学大学院教授、早川愛知厚生連足助病院院長 他

(4) 総務省

桜井情報通信国際戦略局長、高崎総合通信局長（司会）、渡辺情報通信政策課長 他

4. 議事

(1) 豊田市におけるICT街づくり推進事業の取組み等について

(2) フリーディスカッション

5. 議事概要

(1) 豊田市におけるICT街づくり推進事業の取組み等について

森川名古屋大学大学院教授、小倉岐阜大学大学院教授より、資料1に基づき説明が行われた。

(2) フリーディスカッション

主な発言は以下のとおり。

【佐藤構成員】

○CANについて、集めたプローブ情報は交通渋滞における予測やシミュレーションに非常に有効であって、例えば道路工事があるとどのように渋滞が変化するのかといった情報を街に展開することなどができると思うが、そのような研究の取組みやまたは今後の予定があれば教えていただきたい。

○また、ICTベンダーに対して、技術的・機能的な面での要望等があれば、ぜひお聞かせいただきたい。

【森川教授】

○CANデータを使ったシステム構築には取り組んでいる。このプロジェクトが始まる前から、CANではない普通のプローブ情報として、位置情報と時刻情報を使って渋滞を予測し、その予測された渋滞に対してルート案内をするというようなシステムの構築をしている。今回、CANのデータとしてより詳細な速度情報や燃料噴射量情報等を活用し、単なるルート案内だけではなく、例えばエコルートの案内や、CO₂排出量最小の経路を案内する仕組みの構築も、今後考えていきたい。

○大学ではビッグデータをきちんと管理する手法がなかなか無い。ベンダーに依頼するとサーバーの運営が高価であり、大きなシステムを継続的に運用することが難しいことをこの何年間かの研究で感じている。交通情報だけでなく様々なデータを得てサービスの種類を増やすことによって、コストシェアができるようなプラットフォームを作る取組みなどに、ベンダーの皆様のご助力をいただきたい。

【齋藤構成員】

○医療関係の取組みはカードを持っていただくことがまず前提となっているが、市民の皆様は、メリットがわかりやすく、能動的に持とうと言っていたか、又は、はじめは少しの方だけに持ってもらっていたものが徐々に広がってきたのか。カードの普及を図る工夫等があれば教えていただきたい。

【小倉教授】

○自分自信が何かのトラブルを経験した方は能動的に持っていたが、そうでなければ今回のように、交通系との合体等によって持つ機会を増やすことが拡大への道。加えて、自治体を中心とした協力によりさらに拡大が図られる。使う住民が増えれば増えるほど効果も増える。

【梶浦構成員】

○CANプローブやアクティブ・プローブとして収集された情報は、現時点でどの範囲に公開されているのか。

【森川教授】

○CANプローブはまだ広く一般には公開しておらず、モニターがPCやスマートフォンを通して見られるようになっている。アクティブ・プローブも同様はまだ発信側も限られた範囲であり、本事業の関係者と市の当局のみが見られる状態。

○特にアクティブ・プローブは、多くの方から情報を得ようとすると、質の悪い

情報や悪意のある情報も出てくるので、そのスクリーニングが必要。パッシブプローブについては、予測情報として勝手に出すのは交通管理者との関係で難しいが、蓄積情報を過去の実績として公開する方向で検討したい。

【梶浦構成員】

- CANプローブ情報により渋滞状況や危険箇所がわかったとして、現在は関係者の間でそれを見ていると言うことだが、街づくりの取組みとしては情報を集めただけではなく、やはり街にフィードバックしてほしい。初年度としては大変な成果だと思うが、今後、例えば救急隊員による渋滞情報の利用や、時間帯、渋滞状況に応じてバスレーンを設定するような政策につなげていくことができると思う。
- アクティブ・プローブについても、総務省のG空間×ICT推進会議でボランティアで地図情報を作るべきという議論があるが、まさにアクティブ・プローブの発信者が、ボランティア的に巡回事業者になり代わって市道を守るといったようなことにもつながると思う。そのような取組みの計画があれば教えていただきたい。

【森川教授】

- まさにご指摘のようなことを考えている。非常にアクティブな住民から、日常的に気づいたことをどんどん上げていただくだけでなく、そうでない方にも、1年に1～2回だけでも気づいたことを上げていただきたい。例えば、あの看板どうにかならないのかといったような情報も、街づくりにおいては貴重な情報。寄せられた情報を市役所の中でスクリーニングして、街づくりに役立てていきたい。
- パッシブ・プローブについては、公開して市民にサービスを還元することが原則。豊田市では、市が運営するITS情報センターにおいて「みちなびとよた」という統合型の情報サービスを保有している。このプローブ情報をその中で完全に出せるかどうかについては行政的な検討が必要だが、現時点では、大学や協議会の責任でこのプローブ情報を広く公開し、市はそこにリンクを張るという方向を考えている。

【武藤構成員】

- あすけあいカードを今後、足助地区だけではなく市全体に展開していくにあたり、どのような取組みを検討しているのか。
- APPLICでは自治体の行政情報連携のための標準化の検討を進めている。基幹業務の標準化はだいたい終わっており、今後、防災・教育といった分野に加え、本取り組みのような医療・健康分野の指標化を進めていくところ。今後ともご相談をさせていただきたい。

【太田市長】

- 豊田市では現在のところ、例えば患者のたらい回しが生じているといったような緊急度の高い課題があるわけではないが、今後高齢化がますます進む中で、医療設備やスタッフが急に拡大することは考えにくい。今後在宅での介護が増えることを考えると都市部の方がこうした事業のニーズが高まるのではないかと考えている。その意味で、中長期的にはこの足助地区での取り組みが都市部で拡大していくことを期待している。
- 豊田市は「車のまち」を標榜しているが、渋滞や交通事故については他の自治体同様、問題として抱えている。旧来型のハード面での取り組みは今後も進めていくが、ハードだけで今後も対応しきれるとは思えず、そこをカバーするのがICTだと考えている。市の政策として取り組めることは積極的に取り組んでいきたい。

【細川構成員】

- 小さなシステムを作って上手に実証を始めている。今後都市部への展開を図る上で、システムが重くなるなどの課題が出てくると思うが、まずは小さなシステムを地域限定でスタートさせ、それを大きくしていく取組みの良いモデルケースとして注目したい。
- 医療対応のデモで、カードの情報を救急隊が端末で読み取り、その内容を病院に電話で伝えていたが、データ通信で病院に伝送するなどの工夫の余地はないのか。

【小倉教授】

- ご指摘のとおり、まずはシステムを小さく作り、住民の方々にメリットを感じていただいた後にシステムを複雑化していくという取組みの過程にある。
- 病院へのデータ転送については、技術的な実現方策は分かっているが、コストとメリットのバランスを考えているところ。

【桜井局長】

- 医療系システムの中で、今後このカード自体は本人認証機能となり、その裏にある電子カルテ情報を読み取るようになっていくと思うが、それに対して住民の皆様から何か不安感のようなものは示されてくるものなのか。

【小倉教授】

- 医療情報の連携について、総論的には皆さん賛成だが、少し不安が残るという意見はよく聞く。そこに踏み込むために、目に見える形でメリットを示すのが1つの方法であり、命の問題である救急を切り口にするのが一番重要かつ効果

的だと考えた。

- カードに保存する情報には限りがあり、救急搬送の最初の5分間に必要な情報に絞っているため、それで全てを網羅できるわけではない。ただ、逆に、その5分間に多くの情報がありすぎてもまた困ることになる。
- 次は、現在であれば1時間後に他の病院の情報が届くという状況を、できるだけ早く見られるようにすることが課題。EHRを作って豊田市全体で継続的に維持することが理想的だが、それはなかなか大変だということで、まず簡易的に各病院の電子カルテをEHRに見立てて、そこにアクセスしていく方式を当面の方策と考えて、次年度導入しようとしている。それにあたり、住民の方々の不安があるかないかについては、説明をした上で同意書をとって見て、その際の反応を見てみたい。何となく嫌なんだけど、メリットを理解した上で合意していただける患者さんがどれぐらいいるのかというのを特定したい。

【佐藤構成員】

- 多くの自治体でICTを活用した積極的な観光情報の発信を行っているが、コンテンツ作成や運用の負荷が大きいと聞いている。観光案内について、長期間にわたる運用に向けた取組みや、行政と仕事とするのか民間のビジネスに持っていくのかの将来構想など、見解があれば教えていただきたい。

【森川教授】

- 観光情報については、今回の取り組み自体は目新しいものではないが、ご指摘のとおり魅力的なコンテンツを更新していくというのが一番の課題だ。コンテンツの作成やサーバーの運営などを業者に依頼すればコストもかかるので、市民力をうまく活用し、市民から上がってくるコンテンツをうまく運用することで魅力度のキープと運用費用の低コスト化を考えていきたい。

【梶浦構成員】

- 交通系の取組みとして、情報源を自動車だけでなく歩行者や自転車にも拡張される予定はあるか。また、交通政策に活かすために収集する情報として、CANで取得できる情報に欠けている情報、欲しい情報があれば教えていただきたい。

【森川教授】

- 歩行者や自転車にも広げていきたいと考えている。特に歩行者からのアクティブ・プローブ情報には期待しており、例えば障害者から通れないルートの情報などをどんどん上げていただきたい。
- CANには車の周りの情報が欠けている。ドライブレコーダーで撮影した映像情報があれば渋滞情報や事故の情報も分かるので、今後取り組んでみたい。

【武藤構成員】

○災害対策基本法が改正され、要援護者支援の名簿を作成できるようになるが、あすけあいカードの情報をこの名簿に展開していくことは可能だとお考えか。

【太田市長】

○あり得ると思う。法律の動きや地域のニーズを踏まえた意見交換をしながら、今後検討することになると思う。

【岡座長】

○統合カードを活用して、交通・医療両面から実証を進めていただき、特に医療分野の取組については大変感銘を受けた。情報の利用範囲について市民の同意を得た上でサービスをするというのは、豊田市だけではなく、日本全体の共通テーマとして、国民へのサービスを向上させるためのやり方として必要になる。

○今、決まりつつあるマイナンバーについても、活用範囲をどこまで広げるのかというようなときに必ずその問題が出てくる。そういった状況の中で、この豊田市で、課題解決先進地区としてこのようなことを初めていただいたと言うことがすばらしい。

○今後さらにカードの機能を高め、例えば診察券との一本化や、全ての病院に行っても大丈夫なようにするといった取組に向け、もう少し実証規模も拡大させていくと思うが、このカードは1枚いくらくらいかかるのか。

【小倉教授】

○おそらく、今、2,000円台だと思われる。

【岡座長】

○そうなると、住民がメリットをどれだけ感じるかということが大変重要になり、2,000円ぐらいなら買ってもらってもいいような値段であると感じていただくことが重要。むしろ都会の方がこのカードが必要になるという気もする。

○いずれにせよ、豊田市の先進的な取組がよく把握できた。さらにこれを、機能の高度化・範囲の拡大を是非やっていただきたく、私どももできるだけだけの応援をしていきたい。

以上